

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 5 日現在

機関番号：34309

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350733

研究課題名(和文) 幼児期の運動遊びのプログラム研究 - 「幼児期運動指針」を手掛に-

研究課題名(英文) A study of the program of the infant exercise play -referring to "Early Childhood Exercise Guideline"-

研究代表者

口野 隆史 (Kuchino, Takashi)

京都橘大学・人間発達学部・教授

研究者番号：60192027

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、文部科学省が示した「幼児期運動指針」(以下「指針」)を手掛かりに、現代の子どもの環境・状況に合った「幼児期の運動遊びのプログラム」を作成することである。そのために、まず「指針」が保育所・幼稚園等でどのように扱われ、保育者らがこの「指針」をどの程度読み・理解しているのかを探った。

各保育所・幼稚園には「指針」の『ガイドブック』が配布されている。73園への調査では、この『ガイドブック』の扱いは「職員室で閲覧」47%、「回覧」23%、「何もしていない」21%であった。237名の保育者への調査から、「指針」『ガイドブック』を読んだことのある者は36%、理解している者は29%であった。

研究成果の概要(英文)：A purpose of this study is to create "A program of the infants exercise play" considering the environment and the situation of the modern children. On this occasion, we refer to "Early Childhood Exercise Guideline" that Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology showed. Therefore at first, in the nursery schools and kindergartens we investigated how this "Guideline" was treated and whether nursery teachers read and understood it.

The "Guidebook" of this "Guideline" is distributed to each nursery schools and kindergartens. In the investigation in 73 nursery schools and kindergartens, as for handling of this "Guidebook", "Reading at the staff room" was 47%, "The circulation of the guidebook" was 23%, "We do nothing in particular" was 21%. According to the investigation to 237 nursery teachers, the nursery teachers who had read "Guideline or Guidebook" was 36%, the nursery teachers who had understood was 29%.

研究分野：体育科教育学

キーワード：幼児期運動指針 幼児の運動遊び 保育者 保育所・幼稚園等 プログラム ガイドブック

1. 研究開始当初の背景

(1) 文部科学省による報告やこの分野の研究動向

子ども、幼児の体力・運動能力

文部科学省は「平成 24 年度体力・運動能力調査結果」において、「新体力テスト施行後の 15 年間の合計点の年次推移をみると、小学校高学年以上の年代では、緩やかな向上傾向を示している」などの内容を発表した。

一方、幼児の状況はどうであろうか。中村ら(中村和彦他「観察的評価による幼児の基本的動作様式の発達」『発育発達研究』第 51 号 2011 年)は、今日(2007 年)の幼児の基本的動作(疾走、跳躍、投球、捕球、まりつき、前転、平均台移動)の様式と 1985 年のそれを比較し「7 種類の基本的動作とも今日の幼児の基本的動作の習得状況は、1985 年の幼児と比べ、低い発達段階にとどまっていることが認められた。さらに特筆すべき結果として、動作発達得点の比較から、今日の年長児の基本的動作の習得状況が、1985 年の年少児と同様であることが示された」と述べている。今日の幼児らの動作は、いわゆる“ぎこちなく、不器用さが目立ち、より幼いもの”ということになる。筆者も 1980 年代に記録したその当時の幼児の映像を保存しているが、その様子を見ると現在の小学生のようにも感じる。

「幼児期運動指針」の公表

このような状況を受け、2012 年 3 月文部科学省は「幼児期運動指針(及びガイドブック)」を示した。このガイドブックにおいては、幼児期を運動発達の側面からも、社会性の発達や認知的な発達の側面からも重要な時期と捉えている。そして、この時期を生かす 3 つのポイントとして、1)多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること、2)楽しく体を動かす時間を確保すること、3)発達の特性に応じた遊びを提供すること、を示している。

(2) これまでの研究成果を踏まえ本研究の着想に至った経緯

口野はこれまで「幼年期の運動能力目標に関する研究 - 昔の子どもと今の子どもの運動能力比較を通して - (基盤研究(C)(1)、平成 13~15(2001~2003)年度、課題番号:13680075)」において、ベテラン・中堅・若手の各保育者らに、幼児の運動能力に関する質問をし、1980 年代から 2003 年ごろまでの幼児の運動の状況を調査した。それらを比較し、いわゆる昔の子どもの持つ運動に関する長所を、現代の子どもの短所を補うために活用しようと考えた。

また「『昔の遊び(鬼ごっこなど)』が現代の幼児・子どもの運動能力の形成に果たす役割(基盤研究(C))平成 19~21(2007~2009)年度、課題番号:19500518)」においては、広い園庭の保育園(いわゆる昔の遊びを多く行える可能性のある園)と、狭い園庭の保育園(狭い園庭には子どもの運動のためにフイ

ールドアスレチック(木製大型固定遊具)が設置されている園)の子どもたちにインタビュー等の調査を行った。調査の内容は、昔からの遊びである「鬼ごっこ」に関する幼児らの認識についてのものであった。広い園庭で遊ぶ子どもたちには、「はさみうち・先回り」などの相手の動きを予測する認識が育っていること、狭い園庭の子どもたちからは「曲がる・止まる」などの動作についての認識が育っていることなどがわかった。

「幼児期運動指針」にも示されているように、現代の幼児は昔の幼児とは異なり、現状のままではますます運動を行う機会に恵まれない。運動を行っていくには、その条件を整え、運動のプログラムを考えるなど、いくつかのお膳立てが必要である。全国の保育園・幼稚園は、園庭が広い・狭い、園児数が多い・少ないなどそれぞれその条件は様々である。狭くて人数の多い園では、ますます幼児の運動離れが進むと思われる。「幼児期運動指針」にある 28 個の動きを獲得していくためには、さらなる工夫が必要である。それは、幼児の動きの面だけでなく、幼児の「わかる(認識)」に働き掛け、その動きの獲得をよりスムーズにすることも重要である。

2. 研究の目的

本研究では、現代の子どもの環境・状況に合わせた幼児期の運動遊びのプログラムを作成することを目的とした。その際、文部科学省が示した「幼児期運動指針」を手掛かりにすることを考えた。

このためにまず「幼児期運動指針」が、保育所、幼稚園、こども園等においてどのように扱われているのか、特に具体的には、以下の点を明らかにした。(以下「幼児期運動指針」を「指針」、『幼児期運動指針ガイドブック』を『ガイドブック』と表記する)

(1)園長は『ガイドブック』を各園においてどのように扱っているのか。(2)保育者は「指針」『ガイドブック』をどのように受け止めているのか。(3)保育者は「指針」『ガイドブック』を読んでいるのか、理解しているのか。(4)保育者らは「指針」『ガイドブック』のポイント(内容)を日頃の運動遊びの実践でどの程度意識しているのか。

3. 研究の方法

(1)調査対象:調査は、京都、滋賀、福岡、宮城の各府県の保育園 32 園、幼稚園 38 園、こども園等 3 園の計 73 園に依頼。

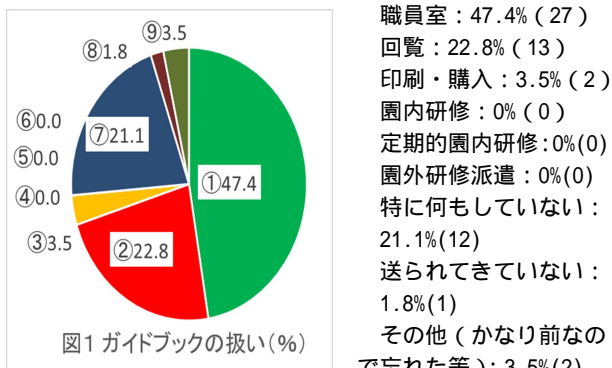
(2)調査内容:調査内容(用紙)は、園児数や園環境等を尋ねる「園長用調査用紙」と、「指針」『ガイドブック』についてやクラスの状況等を尋ねる「3、4、5 歳児クラスの担任用調査用紙」に分け各園に郵送で、園名は匿名で依頼した。

4. 研究成果

(1) 園長への調査から

調査用紙の回収：73 園に依頼し、57 園から回答を得た。回収率 78%。

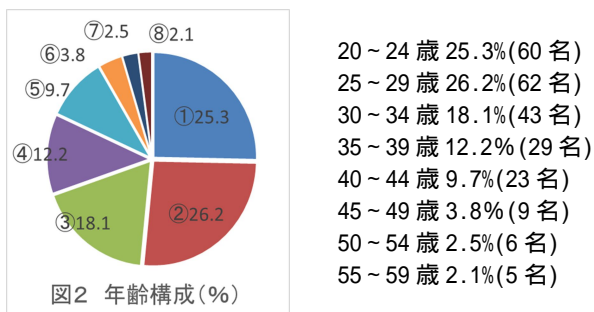
『ガイドブック』の扱い：園長には『ガイドブック』の扱いに関する次の質問を行った。「『ガイドブック』が各教育委員会を通して保育所・幼稚園などに送られていると聞いています。その『ガイドブック』はどのように扱われていますか」。それに対し、図にあるような選択肢をもうけ、“複数回答可”で回答してもらった。



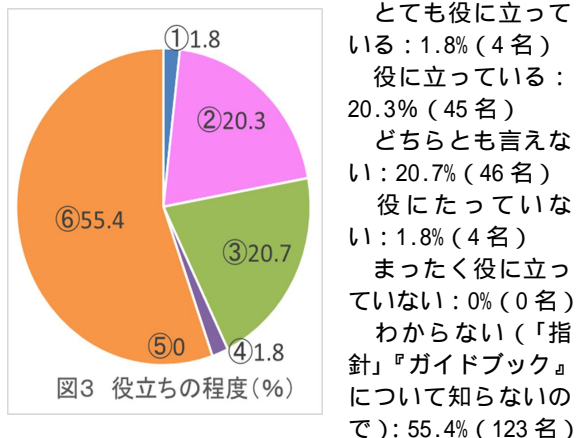
このことから、保育所・幼稚園に『ガイドブック』が届いてから、それをどのように活用するかも今後の課題であると思われる。

(2) 保育者への調査から

回答数、年齢構成等：回答総数は 237 名。年齢構成、性別は以下の通り。女 212、男 22。



保育者にとって「幼児期運動指針」「幼児期運動指針ガイドブック」の役立ちの程度「『指針』『ガイドブック』が、クラスの子どもたちと運動遊びを行なう際、指導する際に、役に立っているか」の質問への回答。



半数以上が「わからない(「指針」「ガイドブック」について知らないの)」という状況であり、まず「指針」の存在を知らせる工夫も必要である。また「とても役に立っている、役に立っている」という回答もある。この保育者らの「指針」の活用について調査からも読み取れればと考える。

保育者は「指針」「ガイドブック」を読んでいるか、また理解しているか

- 「先生は「指針」あるいは『ガイドブック』を読まれたことがありますか」の回答。
 ア. 読んだことがある：35.6% (80名)
 イ. 読んだことがない：64.4% (145名)
- 「先生は「指針」あるいは『ガイドブック』の内容を理解しておられますか(読まれたことはなくても、園内の研修、園外の研修などで、その内容について学ばれた方もおられると思います)」の回答。
 ウ. 理解している：29.3% (66名)
 エ. 理解していない：70.7% (159名)

「指針」「ガイドブック」について「読みの有無」と「理解の有無」と保育者の運動遊びに対する意識との関係

- 「1. 多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること、2. 楽しく体を動かす時間(60分以上)を毎日確保すること、3. 発達特性に応じた遊びを提供すること」の3点は「指針」「ガイドブック」にある重要な点である。保育者らは日頃、これらの点をどの程度意識しているのか。この3点の「指針」の解説文から12の質問を作成し、これらの点を保育者がどの程度意識しているのか、とてもそう思う、そう思う、そう思わない、まったくそう思わない、の4点法で聞いた。12の質問の以下の通りである。
- 多様な動きが経験できるように様々な遊びを意識して取り入れている。
 - 体のバランスを取る動き(立つ、座るなど)を意識して取り入れている。
 - 体を移動する動き(歩く、走るなど)を意識して取り入れている。
 - 用具を操作する動き(持つ、運ぶなど)を意識して取り入れている。
 - 楽しく体を動かして遊ぶことを意識している。
 - 運動遊びを毎日行えるよう意識している。
 - 発達特性に応じた遊びを提供するよう意識している。
 - 身体の諸機能をいっばいに使って動く遊びを意識して提供している。
 - 活動意欲を満足させる遊びを意識して提供している。
 - 体に過剰な負担が生じない遊びを意識して提供している。
 - 興味や関心・意欲など運動に取り組む過程を意識して大切にしている(早急な結果を求めないようにしている)。
 - 子どもは個人差が大きいので一人一人の発達に応じた援助をするように意識している。

1) 「指針」「ガイドブック」を「読んだ保育者」「読んでない保育者」による「指針」の重要点(ポイント)に対する意識の違い

「指針」「ガイドブック」を「読んだ保育者」と「読んでない保育者」では、先の「指針」の重要点(ポイント)に関し、意識が違うのかどうかを、この12の質問を通して見た。

表1. 「指針」「ガイドブック」を「読んだ・読まない」による「指針」のポイントに対する意識の違い

(† p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001)

	読んだ・読まない	グループ統計量			t 検定
		N	平均値	標準偏差	
1.多様な動き	読んだことがある	80	3.3	0.488	n.s.
	読んだことがない	151	3.27	0.516	
2.バランス	読んだことがある	82	3.26	0.605	n.s.
	読んだことがない	150	3.2	0.556	
3.体の移動	読んだことがある	82	3.3	0.56	n.s.
	読んだことがない	152	3.2	0.556	
4.用具操作	読んだことがある	82	2.99	0.583	n.s.
	読んだことがない	152	2.99	0.641	
5.楽しく動く	読んだことがある	82	3.77	0.425	n.s.
	読んだことがない	151	3.8	0.4	
6.毎日遊ぶ	読んだことがある	82	2.95	0.701	†
	読んだことがない	151	2.78	0.67	
7.発達特性	読んだことがある	82	3.29	0.533	n.s.
	読んだことがない	152	3.28	0.589	
8.身体諸機能	読んだことがある	80	3.13	0.644	n.s.
	読んだことがない	152	3	0.523	
9.活動意欲	読んだことがある	82	3.41	0.587	n.s.
	読んだことがない	151	3.29	0.573	
10.過剰な負担	読んだことがある	81	3.3	0.535	*
	読んだことがない	151	3.1	0.558	
11.興味関心	読んだことがある	82	3.61	0.491	n.s.
	読んだことがない	152	3.55	0.525	
12.個人差	読んだことがある	82	3.6	0.541	n.s.
	読んだことがない	150	3.53	0.552	

表1.から、「指針」「ガイドブック」を「読んだ保育者」と「読んでない保育者」では、先の「指針」の重要点(ポイント)に関し、2項目を除き「意識の違い」は見られなかった。

2) 「指針」「ガイドブック」を「理解している保育者」「理解していない保育者」による「指針」の重要点(ポイント)に対する意識の違い

「指針」「ガイドブック」を「理解している保育者」と「理解していない保育者」では、先の「指針」の重要点(ポイント)に関し、意識が違うのかどうかを、この12の質問を通して見た。

表2. 「指針」「ガイドブック」を「理解している・理解していない」による「指針」のポイントに対する意識の違い

(† p<.10, * p<.05, ** p<.01, *** p<.001)

	理解の状況	グループ統計量			t 検定
		N	平均値	標準偏差	
1.多様な動き	理解している	65	3.32	0.471	n.s.
	理解していない	157	3.25	0.518	
2.バランス	理解している	66	3.35	0.54	*
	理解していない	158	3.16	0.581	
3.体の移動	理解している	66	3.38	0.548	*
	理解していない	159	3.18	0.557	
4.用具操作	理解している	66	3.08	0.59	†
	理解していない	159	2.91	0.624	
5.楽しく動く	理解している	66	3.8	0.401	n.s.
	理解していない	158	3.78	0.417	
6.毎日遊ぶ	理解している	66	3.11	0.611	***
	理解していない	158	2.74	0.688	
7.発達特性	理解している	66	3.44	0.5	**
	理解していない	159	3.21	0.589	
8.身体諸機能	理解している	65	3.25	0.587	***
	理解していない	158	2.95	0.551	
9.活動意欲	理解している	66	3.48	0.504	*
	理解していない	158	3.27	0.602	
10.過剰な負担	理解している	65	3.29	0.551	*
	理解していない	158	3.12	0.552	
11.興味関心	理解している	66	3.68	0.469	*
	理解していない	159	3.53	0.525	
12.個人差	理解している	66	3.59	0.526	n.s.
	理解していない	157	3.54	0.561	

表2.から、「指針」「ガイドブック」を「理解している保育者」と「理解していない保育者」では、先の「指針」の重要点(ポイント)に関し、3項目を除き「意識の違い」が見られた。

A「読んだ・理解している」、B「読んだ・理解していない」、C「読んでない・理解している」、D「読んでない・理解していない」の4グループの特徴(傾向)

「指針」「ガイドブック」を「読んだことがある」「読んだことがない」「理解している」「理解していない」の人数は下記の通りである。

表3 読みの有無と理解の有無のクロス表(人数)

		理解の有無		合計
		理解している	理解していない	
読みの有無	読んだ	A 51	B 29	80
	読んでない	C 15	D 130	145
合計		66	159	225

1) A「読んだ・理解している」グループの年齢構成

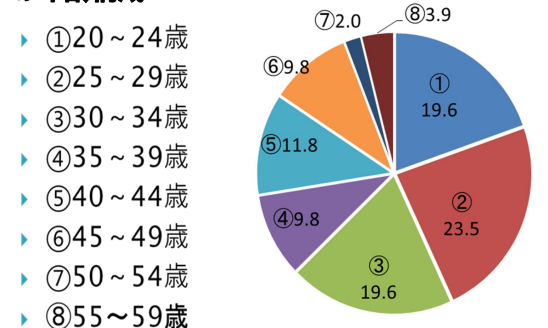


図4 A「読んだ・理解している」グループの年齢構成

A「読んだ・理解している」グループでは40代の先生の割合が高く、主任クラスの先生が「読んで・理解されている」ようにも思われる。一方全体の年齢構成では半分以上を占めていた20代の先生は、ここでは合計で43.1%とその割合が低くなっている。

2) B「読んだ・理解していない」グループの年齢構成

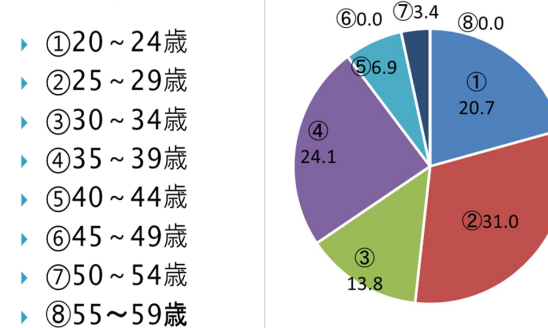


図5 B「読んだ・理解していない」グループの年齢構成

B「読んだ・理解していない」グループでは、30代後半の保育者の割合が高くなっている。年齢が上がることで必ずしも理解が進むということではないようである。

3) C「読んでない・理解している」グループの年齢構成

- ▶ ①20～24歳
- ▶ ②25～29歳
- ▶ ③30～34歳
- ▶ ④35～39歳
- ▶ ⑤40～44歳
- ▶ ⑥45～49歳
- ▶ ⑦50～54歳
- ▶ ⑧55～59歳

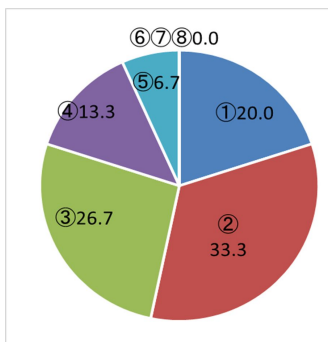


図6 C「読んでない・理解している」グループの年齢構成
C「読んでないが・理解している」グループでは、20代後半と30代前半の保育者の割合が高くなっている。

4) D「読んでない・理解していない」グループの年齢構成

- ▶ ①20～24歳
- ▶ ②25～29歳
- ▶ ③30～34歳
- ▶ ④35～39歳
- ▶ ⑤40～44歳
- ▶ ⑥45～49歳
- ▶ ⑦50～54歳
- ▶ ⑧55～59歳

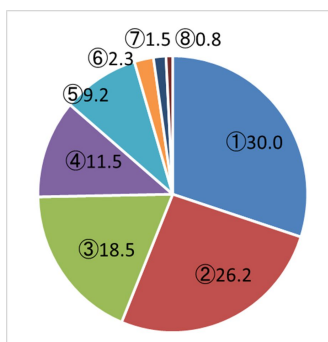


図7 D「読んでない・理解していない」グループの年齢構成
Dの「読んでない・理解していない」グループでは、「指針」が2012年に発表され、大学や養成所で学ぶ機会があったと思われる20代前半の先生方が最も多くの割合を占めている。大学や養成所での、「指針」の扱いも影響していると思われる。

(3)この調査でのまとめと課題

園長の調査から、『ガイドブック』の扱いは園によって差が見られた。職員室で閲覧可能にし、回覧し、購入して配布までする園もあれば、何もしない園もあった。

「指針」『ガイドブック』を読んだことのある保育者は35.6%、理解している保育者29.3%であった。20歳代前半の最も「読んで・理解している」と思われる年代の保育者がそうではない傾向が見られた。大学、養成所の課題でもありと思われる。

経験を積み年齢が上がるに従い「指針」の理解が進むというわけではないと思われる(30歳代)。「指針」の理解を進めるのであれば、保育の現場の状況と合わせ、とりたててこのことについて学ぶ必要があると思わ

れる。

必ずしも「指針」が現場の保育園、幼稚園に浸透していないように思われる。

今後、園長への調査と保育者の調査を関連付け、園の立地や園環境等とも考え合わせ、保育者が置かれている保育環境により、この「指針」についての理解や、その内容の意識の仕方についてどのような違いがあるのかも考えていきたい。

(4)今後の課題

この科研費の研究においては「現代の子どもの環境・状況に合わせた幼児期の運動遊びのプログラムを作成する」ことを大きな目的とした。そのメインの目的に迫るために、以下の点などをサブの目的として設定した。

サブ目的1：幼児期の運動学習におけるつまずきを発達段階とともに明らかにする。認識、言葉、遊び、社会性等の発達と関連させ、幼児の運動発達のつまずきのポイントを探る。サブ目的2：幼児期に運動学習の際の“わかる”を発達段階とともに明らかにする。保育者の言葉掛け、オノマトペ等を参考にしつつ、幼児の運動学習の“わかる”を考える。サブ目的3：園庭の狭い保育園等における幼児の運動遊びの実態を明らかにする。実際に多くある“園庭が狭く園児数の多い保育園”等の幼児の運動遊びの実態を把握する。

その際、サブテーマにもあるように文部科学省が示した「幼児期運動指針」を手掛かりにしたいと考へた。このためにまず「幼児期運動指針」が、保育所、幼稚園、こども園等においてどのように扱われているのか、保育者らの間でどのように受け止められているのかを明らかにした。この報告書においては、特にこの点について報告した。

この点については、今後以下のようなことが課題であると考えている。

「幼児期運動指針」の普及

「幼児期運動指針」は保育の現場において役立てている保育者もあり、これ自体優れたものである。しかし「指針」が役に立っているかどうかの質問に大して、半数以上の保育者が「わからない(「指針」『ガイドブック』について知らないの)」という状況もある。実際の保育場面と合わせて、取り立てて「幼児期運動指針」について学ぶ機会があれば、その理解は広まるように思われる。

実際の保育場面をイメージした作成

従って「幼児の運動遊びのプログラム」の作成においても実際の保育の場面と結びつけた作成の仕方が必要だと思われる。

子どもの実状に合ったプログラム作成

先の調査においては、現場の保育者らが現在担任している子どもたちの運動や身体面について気になっている事などを記述してもらった。今後その内容と保育所・幼稚園等の環境面の情報(例えば園庭の広さや園の立地条件等)とを合わせて、さらに子どもを取り巻く環境や状況に応じた運動遊びのプロ

グラムを考えたい。

現状において「幼児期運動指針」は、「幼児の運動遊びのプログラム」の基本となる最も先行する到達点であろうと考える。今後「運動遊びのプログラム」を考えるには、各保育所、各幼稚園のそれぞれの実状に合わせたものが必要になるものと思われる。

今後、手持ちの調査資料をさらに分析し、これらの課題に迫っていきたい。

幼児の運動遊びのプログラム作成上大切にしたいこと

最後に幼児の運動遊びのプログラム作成上大切にしたいと考えることを示す。

1)子どもの遊びの発達段階に沿うこと

ピアジェによれば子どもの遊びは、2歳頃の「機能的な遊び(子どもは自らの“感覚機能(含:運動感覚)”に働きかける遊び)」から、3、4歳の「象徴的な遊び(ごっこ遊び)」、5、6歳の「ルールのある遊び」へと発展するとされている。このような順序を大切にしつつ、5、6歳になっても「機能的な遊び」や「象徴的な遊び」は大切であり、幼児期にこれらの遊びを行きつ戻りつしながら運動遊びを体験することが大切である。

2)姿勢制御の運動(遊び)からの発展

子どもの動作の獲得はまず、頭の動き、胴体(体幹)の動きから自分の体のバランスを取ることから始まる。「指針」にもあるようにまず「姿勢を制御し、移動する運動感覚」の獲得から始める。次に、先のバランス感覚や移動の感覚を発展させ、「スピードやリズムをコントロールする運動感覚」の獲得をめざす。スピードやリズムを調節し、また強弱を付けながら走る、跳ぶ運動感覚。音楽に合わせて身体を動かす運動感覚。そして「物を操作し、物や人の動きを予測・判断する運動感覚」の獲得をめざす。例えば、ボール(道具)を操作する運動感覚。また、移動する相手の動きを予測して、その子にボールをパスする、当てるなどの運動感覚。

3)個体発生と系統発生を考える

子どもの成長・発達の様子は、人類の進化の歴史を辿るようでもある。このような体験を子どもにはして欲しいと考える。ある幼稚園で、2つのグループが1つの“宝物”を奪い合うことが始まった。最初子どもたちはケンカをしながら宝物を奪い合っていた。見守っていた先生が、子どもたちと一緒に、安全面も考えさせながら、子どもたちと一緒に“お約束”を作っていた。このような子どもたちが先生と共に遊びやゲームのルールを作っていく様子は、サッカーやラグビーの誕生の歴史にも似ている。このような取組は時間もかかるが、子どもたちは自分たちで作った遊びを既存のゲームや遊びよりも、はるかに楽しんで行なう。自分たちが遊びの主体者で、遊びは自分たちがより面白く・楽しくなるようにルールは変えることができるものなのだというのを、しっかり体験して欲しい。

4)子どもが面白いと思うこと

幼児にとっての面白いことには3つの条件があると言われている。「幼児にとって面白いことの第一は、自発的・積極的行動であることとあります。そしてこのことが、対人関係に現れたものとして、第二に、他のひととの間に好意的な交わりが発展することとあります。同じく(第三に)、その子ども自身にかかわっては、知的・身体的機能を積極的に行使することとあります(城丸章夫、1981)」。幼児の運動遊びのプログラム作成においても、この3条件を念頭に置きたい。

5. 主な発表論文等

[学会発表](計 1件)

口野隆史、門田理代子、續木智彦、中島憲子、黒川哲也、鐘ヶ江淳一、海野勇三

「保育園、幼稚園における「幼児期運動指針」の活用状況について - 保育園、幼稚園の保育者への調査を通して同指針の活用の課題を探る - 」

日本体育学会第67回大会 2016年8月、大阪体育大学熊取キャンパス(大阪府熊取町)

6. 研究組織

(1)研究代表者

口野 隆史(KUCHINO, Takashi)
京都橘大学発達教育学部・教授
研究者番号: 60192027

(2)研究分担者

海野 勇三(UNNO, Yuzo)
愛知学院大学教養部・教授
研究者番号: 30151955

鐘ヶ江 淳一(KANEGAE, Junichi)
近畿大学九州短期大学・保育科・教授
研究者番号: 90185918

黒川 哲也(KUROKAWA, Tetsuya)
宮城教育大学教育学部・教授
研究者番号: 50390258

中島 憲子(NAKASHIMA, Noriko)
中村学園大学教育学部・准教授
研究者番号: 00301721

續木 智彦(TSUZUKI, Tomohiko)
西南学院大学人間科学部・講師
研究者番号: 60468791

門田 理代子(KADOTA, Riyoko)
中村学園大学短期大学部・助手
研究者番号: 40641866